

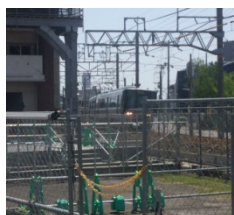
三度目の脱線現場

今から 12 年前、2005 年 4 月 25 日、午前 9 時 18 分に兵庫県尼崎市の JR 福知山線で大惨事が起こった。宝塚発の同志社前行き快速列車が、スピードの出し過ぎにより脱線転覆した。106 名の乗客と運転士が亡くなり、562 名が負傷した。

あの時のことを、今もよく覚えている。事故の日が月曜日であり、ある新聞の取材を受けていた。お祭り騒ぎの「愛知万博」についてだったと思う。記者から関西で大きな列車事故が起きて大変だと聞いて、取材中も気になっていた。まさか、こんな大惨事とは思ってもいなかった。

事故の 1 ヶ月あと、現場を訪れた。まだ生々しい傷跡が残っていた。1 年余りあとに行き、事故に結びついた急なカーブなどを確認した。それから時間がかなり経った。正直なところ、東日本大震災や原発事故に関心が向き、脱線事故が記憶から薄れていた。ここ数年、4 月 25 日というと、林京香さんの誕生日が頭を中心を占めていた。今年は誕生日だけでなく、事故のことも頭から離れなかった。国鉄が分割民営化され、JR が発足して 30 年経ち、関連の資料を読んできた。JR の「光」ばかりが目されるが、JR 西日本による重大事故のような「影」にも目を向けなくてはならない。JR 北海道などの路線廃止とともに、JR 東海によるリニア中央新幹線の「影」にも。

4 月の最終日。大阪市立中央図書館に行った時、尼崎まで足をのびた。記憶が薄れていたが、現場に向け尼崎駅北口から斜めの方向に歩いた。汗ばむ陽気だったが、なんとか福知山線の高架にたどりついた。列車が激突したマンションは、解体作業が進んでいた。「献花場」で手を合わせ、大惨事を思い起こした。列車がカーブを通過する時に、事故の記憶がよみがえってきた。やはり、現場を訪ねることの大切さを感じた。



(2017 年 5 月 2 日)